

〈シンポジウム〉

20周年記念特別シンポジウム「語用論研究の広がり：語用論の関連分野からの提言」

## 意味論と語用論は近づいたか

松本 曜

国立国語研究所

### 1. 意味論と語用論の区別

日本語用論学会のような語用論の学会においても、意味論の論文と呼べるような発表が行われることがある。言語学の体系の中で、意味論と語用論はどのような関係になったのであろうか。意味論と語用論は近づいたのだろうか。

1970年代後半から語用論が言語学の中で盛んになるにつれて、意味論と語用論の区別についていくつかの基準を立てる試みがなされた。Lyons (1987) は、両者が次の対立の点で異なるとした。

- (1) 意味 vs. 使用、慣習的 vs. 非慣習的、真理条件的 vs. 非真理条件的、文脈からの独立性 vs. 文脈依存性、字義的 vs. 非字義的、文（命題）vs. 発話、規則 vs. 原則、能力 vs. 運用

近年、Huang (2014) はこれらに加えて以下の対立を挙げている。

- (2) タイプ vs. トークン、内容 vs. 力 (force)、言語的意味 vs. 話者の意味、言語的にコード化された意味 vs. 非言語的にコード化された意味、意図性依存 vs. 非意図性依存

また、しばしば挙げられる基準として言語知識 vs. 世界知識の対立がある。Blake-more (1992: 32) は意味論と語用論の区別の基底にあるのはこの対立であるとする。

意味論と語用論の区別を、話者の関与の有無に還元しようとする考え方もある。Leech (1983) は、意味論と語用論の区別を、表現の意味か話者の意味かの対立に置く。その区別は英語動詞 *mean* の二つの用法に対応し、“What does X mean?” が意味論の扱う意味、“What do you mean by X?” が語用論の扱う意味であるとする。この考え方では、意味論は表現と意味の二者の関係を、語用論は話者、表現、意味の三者の関係を扱うとい

うことになる。

## 2. 認知意味論における意味観の広がり

しかしながら、その後の意味論、特に認知意味論の発展において、意味論は上記の対立からすると語用論とされる領域に研究対象を広げてきた。恐らく現在の認知意味論者の多くは、自らの研究が(1)、(2)に挙げた対立項のどちらに当てはまるのかを問われれば、多くの場合両方にまたがっていると答えると思われる。それでは、認知意味論の発展において、どのように意味論は研究対象の範囲を広げ、語用論に属するとされていた範囲を扱うようになったのだろうか。

認知意味論における意味観の拡大の一つは、百科事典的知識(言語外知識、世界知識)の扱いに見える。これは典型性の発見と関係する。認知意味論では *red*, *bird* などのカテゴリーに、典型的なメンバーとそうでないものがあるとされ、本質的でないとされるような属性が典型性に関与するとする。Lakoff (1987) によれば、客観主義的な意味論においては、本質的特性と付随的特性を区別し、前者のみを意味論(語の意味)の対象とし、後者は語用論(百科事典的な世界知識)の対象としていた。*fish* の〈泳ぎが上手い〉などは後者とされた。しかし、*He is a regular fish* (彼は泳ぎが上手い)などの表現は付随的特性を知っていないと理解できない。これは付随的特性が意味論の一部であることを示している。Lakoff (1987: 137) は、このことから、意味論と語用論の区別は有効ではないとする。

同様の観点は、Langacker (1987) の百科事典的意味観にも見える。Langacker は、バナナの形、色、味、食べ方、植生なども、*banana* の意味の一部であると考えている。その上で、意味論と語用論(あるいは言語的知識と言語外知識)の区別は、多分に人工的(恣意的)であり、妥当な言語学の意味論とは百科事典的なものであると主張する(Langacker 1987: 154)。ここでも、意味論と語用論の境界の曖昧性が指摘されている。

Fillmore (1985) は、さらに一歩進んだ主張をしている。Fillmore は語の背後にある百科事典的な世界知識をフレームと呼び、それが語の意味や語と語の意味関係の記述のみならず、談話的な推論にも使われるとしたのである。ここでは談話的な意味への広がりが見られる。

それに加えて、認知意味論においては、非字義的意味、非慣習的意味が扱われるようになった。そのきっかけとなったのは、概念メタファーに関する研究である。Lakoff and Johnson (1980) は、*literal* (=意味論) vs. *nonliteral* (=語用論) という考え方では語用論に属すると考えられるメタファーの問題を、意味論さらには認知の問題として捉えた。また、メタファーは特定の個人の言語運用の問題ではなく、言語の体系の一部であり、また特殊な修辭的な現象ではなく、通常の日常的な言語の中に見られるものであるとした。ここにおいても、意味論の範囲が広げられ、また従来運用の分野に属するとされた問題が

扱われるようになったと言える。

さらに重要なのは、認識主体（概念化者）の役割が認知されるようになったことである。Langacker は、言語学的意味論にとって重要なのは、「認識主体が、表現のための選択の中で、どのように状況を解釈 (construe) し、描き出すか」であるとした (Langacker 1991: 316)。注目すべきことは、この考え方において、表現と意味の関係ではなく、表現、意味、認識主体という三者の関係が考察されている点である。Leech が、話者が表現によって何を伝えるかを語用論の課題と考えたように、Langacker は、認識主体が特定の表現の選択において、どのような事態解釈を行っているかを意味論の課題だと考えている。この点で認知意味論は、話者の役割を考察する語用論に近い考え方を採っていることになる。

以上のように、認知意味論では、言語的知識と言語外知識、字義の意味と非字義の意味、慣習の意味と非慣習の意味の区別を越え、談話的な意味、さらに言語運用の領域とされていた領域に踏み込み、認識主体の役割を認めて、意味論の範囲を広げてきた。つまり、意味論が自らに課していた縛りを取り払い、従来、語用論の領域内にあると考えられていた課題を扱うようになったと言える。

### 3. 認知意味論における意味論と語用論の関係

では、認知意味論において、意味論と語用論の区別はなくなったのであろうか。語用論者の Huang (2014) は、意味論と語用論の区別に関して、還元主義と相補主義の二つがあるとする。前者は一つがもう一つに還元されるという考え方であり、後者は二つの独立性を認めて、二つが相補的であるとする考え方である。そのうえで、Huang は Lakoff、Langacker らの考え方を還元主義であるとする。認知意味論においては、語用論が意味論に還元されていると考えているようである。

認知意味論者は本当にそう考えているのであろうか？ 実際のところ、多くの認知意味論者はそこまで踏み込んだ考え方をしていない。Langacker (2007) はこの問題に関して次のように述べている。

認知言語学の主張は、意味論と語用論の線引きが恣意的になるということであり、語用論の存在や、意味論との区別の可能性を否定するものではない。意味論と語用論は程度の問題である (Langacker 2007: 432)。

ただし、Langacker が語用論という用語でどのような研究を指しているのかは必ずしも明らかではない。

30年前の研究ではあるが、Sweetser (1987) は、意味論と語用論に関して興味深い発言を行っている。この論文で Sweetser は Coleman and Kay (1981) の *lie* (嘘) の分析の

再分析を行っている。Coleman and Kay は *lie* の意味には、1) 言明が偽である、2) 話者には欺むく意志がある、3) 話者は言明が偽であると知っているという三つの典型条件があるとしたのに対し、Sweetser は *lie* の意味は偽の言明 (false statement) のみであり、他の二つの要素は、典型的な発話の状況に帰着される (「人は真であると思うことを言う」「人は他の人の役に立とうとする」など) と述べている。ここでは意味論と語用論が区別され、語の意味に純粹に意味論的な部分と、語用論的に決定される部分があると考えられている。

このように、認知意味論者の中に、意味論と語用論の区別が存在すると考えている学者がいるのは確かである。実際のところ、語用論の中ではポライトネスや会話分析のように、認知意味論的な考察とは結び付けにくい分野もある。したがって、認知意味論の中で語用論が意味論に還元されているとは言えないであろう。意味論が従来の語用論の領域に入り込み、意味論と語用論の重なりが広がって境界線が不明瞭になったとしても、二つには重なっていない領域もあると言える。

#### 4. 量的転回 (Quantitative Turn)

認知言語学において、近年量的転回と呼ばれる新しい動きがある (Janda 2013)。この動きは、意味論と語用論の関係を考える上で重要であると思われる。量的転回の背景には、用法基盤モデルと呼ばれる考え方があり、これは、言語の構造が言語使用の具体例と密接な関係を持つとするものである。話者が実際に経験するのは個別例であり、一般性は個別性から生じるとする。したがって、使用頻度が言語において重要な役割を果たすというものである。そこから、頻度などの数量的な研究の必要性が生じてきた。もう一つの背景として研究の経験的基盤の問題がある。認知意味論の初期の指導者たちの研究は優れた直感に支えられたものであったが、そのような研究手法には経験的基盤の弱さが指摘されていた。その批判に答える必要もあり、2008年を転機として、認知言語学の研究がコーパスや実験を用いた数量的な研究へとシフトしていったのである。このような研究においては、「ある表現が可能か」ではなく、「実際に使われるか」が問われる。これは、研究の対象が意味から使用へ、タイプからトークンへと移ったことを意味する。

このような流れの中で、意味研究がどのように変わるかを示すために、移動動詞に関する実験的な研究を紹介しよう。国立国語研究所を中心に行われている移動動詞の研究プロジェクト (筆者が代表をつとめているもの) においては、ビデオ映像の内容を話者に言語化してもらう形でデータの収集を行っている。その中で考察されていることの一つとして、どのような状況で直示動詞 (*come*, *go*) が使われるのかがある。

従来の直示動詞に関する研究では、それぞれの動詞がどのような条件で使われるかを考察していた。たとえば、Fillmore (1971) は、*come* は発話時か移動時に話者が聴者が

いる位置への移動を表し、*go* は発話時に話者がいない位置への移動を表すとした。しかし、このような使用の条件を満たしていても、直示動詞が使われるとは限らない。たとえば、話者位置へ人が移動する場合には、*He is coming* のほかに *He is walking toward me* のような表現も可能である。

どのような状況で直示動詞が選択されるのかを調べるためには、実際の使用を見なければならぬ。そこで使われるのが発話実験である。そのような実験を通して、以下のことが明らかになっている。i) *come* の使用頻度は、話者のいる仕切られた領域への移動の場合に、そのような領域がない場合よりも高くなる。また、話者への挨拶などの行為を伴う場合に使用頻度が高くなる (Matsumoto, Akita & Takahashi 2017)。ii) *come* の方が *go* よりも使われる確率が高い。つまり、話者位置 (話者領域) への移動については比較的 *come* が使われることが多いが、それ以外の移動については直示動詞が使われる頻度が低い (様態動詞などが使われる)。

このことから、直示動詞における話者領域という概念の重要性が明らかになり、*come* は、典型的には話者とのインターアクションがより容易な領域への移動を表すという理解が得られた。また、*come* と *go* の立場が同じではないことも明らかになった。このような使用頻度に基づく研究は、語の意味論において今後重要になっていくものと考えられる。

## 5. 結語：意味論は語用論に近づいたか

最後に、冒頭に述べた「意味論と語用論は近づいたか」という問いの答えを考えよう。この問いは意味論の側から考えるか語用論の側から考えるかによって、答えが異なる可能性がある。本稿で考察したような認知意味論の立場からすれば次のように言えるであろう。意味論は、かつて自らに課していた制約を取り払うことによって語用論に近づき、その領域に入り込んだ。その結果、重なりが広がって、境界は曖昧 (blurred) になったと言える。特に、量的転回によってそれはさらに顕著になった。しかし、意味論が語用論のすべての課題を扱うようになったわけではない。その意味では、二つは依然として独立性を維持していると思われる。

### 参考文献

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Coleman, L., and P. Kay. 1981. "Prototype Semantics: The English Word *Lie*." *Language* 57, 26-44.
- Fillmore, C. 1971. *Lectures on Deixis*. Bloomington: The Indiana University Linguistics Club.

- Fillmore, C. 1985. "Frames and the Semantics of Understanding." *Quaderni di Semantica: Rivista Internazionale di Semantica Teorica e Applicata* 6, 222-54.
- Huang, Y. 2014. *Pragmatics* (2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- Janda, L. A. 2013. "Quantitative Methods in Cognitive Linguistics: An Introduction." In L. A. Janda (ed.) *Cognitive Linguistics—The Quantitative Turn: The Essential Reader*, 1-32. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G., and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1): *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 2): *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 2007. "Cognitive Grammar." In D. Geeraerts and H. Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Lyons, J. 1987. Semantics. In J. Lyons, et al. (eds.) *New Horizons in Linguistics* 2, 152-78. London: Penguin.
- Matsumoto, Y., K. Akita, and K. Takahashi. 2017. "The Functional Nature of Deictic Verbs and the Coding Patterns of Deixis. In I. Ibarretxe-Antuñano (ed.) *Motion and Space across Languages: Theory and Applications*, 95-122. Amsterdam: John Benjamins.
- Sweetser, E. 1986. The Definition of *Lie*: An Examination of the Folk Theories Underlying a Semantic Prototype. In D. Holland and N. Quinn (eds.) *Cultural Models in Language and Thought*, 43-66. Cambridge/New York: Cambridge University Press.